座席番号				
受験番号				

国

二〇二二年度　二月二日　入学試験　国語問題

国語の注意　答えはすべて解答用紙に書きなさい。
答えは解答らんからはみ出さないように書きなさい。
字数の指定がある場合は、句読点や記号なども一字に数えなさい。

【試験についての注意事項（じこう）】

1　机の上に出してよいものは、次の三つです。それ以外のものはカバンにしまってください。
①　座席番号シール　と　受験票（机の左上におきます）
②　えんぴつ数本（シャープペンシルも可・色ペンやマーカー、定規の使用は不可）
③　消しゴム

2　次のものを持ってきた場合は、カバンにしまってください。また、休けい時間中も使用してはいけません。
①　腕時計（うで）・置き時計など（音が鳴らないようにしてください）
②　携帯（けいたい）電話・スマートフォン（電源を切ってください）
③　腕時計型の情報端末（たんまつ）（Apple Watch など）
※　許可なく携帯電話・スマートフォンや腕時計型の情報端末を使用した場合、不正行為（こうい）とみなすことがあります。

3　机の中には、何も入れないでください。

4　チャイムが鳴ったら、次のことを記入してから始めてください。
問題用紙　↓　座席番号　と　受験番号
解答用紙　↓　座席番号　と　受験番号　と　氏名

5　問題についての質問は、いっさいできません。

6　気分が悪くなったら、すぐに申し出てください。

7　物を落としたら、自分でひろわず、手をあげてください。

次の文章は、谷瑞恵『神さまのいうとおり』の一節です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

※設問上の都合により、本文には一部省略や改変した箇所があります。また、武のセリフは**太文字**に変えてあります。

杉原武は地方議員の息子で、威張ってまわりから嫌われている。そんな自分を変えたいと思い「猫を飼いたい」と願ったところ、ある日傷ついた猫（ゴンと名付けた）を保護するが、父親に見つかり捨てられてしまう。転校生の吉住拓也とチラシを貼って捜索するうち、元の飼い主の恋人という女性が現れる。女性より先に見つけなければと焦る武はゴンを探していて田んぼの用水路にはまってしまったところを拓也の父に助けてもらった。着替えを借りに拓也の家に来て拓也のひいおばあちゃんを前に語らっている。

「あいつに会ったよ。その人形みたいな、つり目の女。人形屋敷で野良猫に餌やって、ゴンをおびき寄せようとしてたんだよ」

「ホント？　で、ゴンはいたの？」

「いや……、いなかった」

「そっか。それにしても、狐目の女に、狐似の猫。なんだかお稲荷さんにからかわれてるみたいだね」

拓也はおもしろがっているが、武は急に不安になった。飼えないのに、ゴンを拾ってはいけなかったのではないか。バチが当たったらどうなるのだろう。もしもゴンが、本当に川に捨てられてしまっていたらどうしよう。ゴンが無事ではないかもしれないと想像するだけで、武は天罰をくらったような気持ちになる。悪いのは自分だ。だからゴンを守って下さいと、お稲荷さんか何か、わからないものに向かって念じてみる。その一方で、口から出るのは強がりだ。

「またそれかよ。お稲荷さんが猫を配るなんて、迷信だっての」

「そうだ、ひいおばあちゃん、昔見たっていう狐が化けてた女の人って、つり上がった狐目だった？」

ひいおばあちゃんは、動きもまばたきも止めた。息も止めたのではないかと心配したが、考え込んだだけなのか、ゆっくりと口を開く。

「顔はわからんよ。後ろ姿だったからね。髪が長くて、白い服を着てたね。尻尾も真っ白でねえ」

「尻尾があったの？」

「ああそれは、別の日に見た白い狐だよ。この辺りでたまに見かけるんだそうだ。あたしが見たのは一度だけだね」

白い狐はめずらしいけれど、いないわけではない。なのに拓也のひいおばあちゃんは、白い狐と白い服の女を重ねている。

「それからあたしは、何があっても白い狐さんに見守られてるって気がしててね。だって、あたしには姿を見せてくれたんだからね」

勝手な空想だとわかっていても、拓也のひいおばあちゃんは信じている。事実がどうであれ、宝石のように貴重で奇跡に満ちた記憶になっている。

武も、本当は信じている。たまたまゴンを拾ったのではない、お稲荷さんに願ったから武の元に届けられた、武はゴンに選ばれたに違いない、そんな想像が愛おしいから、ゴンのことをとくべつに感じている。

「猫のことなら、お稲荷さんにまかせておくがいいよ。見つかるのも見つからないのも、お稲荷さんのはからいだ」

「でもさ、どうしてお稲荷さんが猫の元締めなの？」

拓也がひいおばあちゃんに訊く。狐はお稲荷さんの眷属（※家来のこと）だというけれど、どうして猫がかかわるのか、考えてみれば不思議だった。

「お稲荷さんは穀物の神さまだろ？　猫は、穀物を荒らすネズミを①タイジするからね。人が猫を飼うのは、そもそもネズミをタイジしてもらうためだったんだから、お稲荷さんと猫が結びついたのかもしれないね」

「ふうん、おじいちゃんが子供のころ、ここで猫を飼ってたって聞いたことがあるけど、その猫もお稲荷さんが連れてきたの？」

ひいおばあちゃんは、しみじみと頷いた。

「拓ちゃんのおじいちゃんが、猫を飼いたいって言ってしまったもんだからね。きっとお稲荷さんに聞こえたんだ。庭によく来てた野良猫が、ある日子猫を連れてきたんだよ」

「へー、子猫って、その野良の子？」

「違うと思うよ。その野良は雄だったし、自分の縄張りに迷い込んだ子猫なんじゃないかね。それにしても、不思議だったよ。野良があたしのいる縁側へ近づいてきて、きちんと座ってね。すると庭の茂みから、子猫がおそるおそる出てきたんだ。野良と同じように並んで座ると、野良はあたしをじっと見て、それから子猫をじっと見て、ゆっくり庭から出ていったよ。おまえはこれからここの子になるんだ、って言い聞かせたのかね。子猫は野良についていかずに、ずっとその場に座ってた。戸を開けたら中へ入ってきて、いつも野良が食べてた餌を食べて、それから死ぬまでここにいたよ」

「ネズミは捕ったのか？」

話に引き込まれていた武は問う。

「ああ、狩りが上手でね。ときどき土間へ置いていったけど、お裾分けのつもりかね」

武も知っている。以前に家にいた猫が、捕まえた蟬やバッタの死骸を置いていくことがあった。あのころはまだ祖父がいて、猫をかわいがっていた。武のことも、かわいがってくれていた。

「お稲荷さんはね、ちゃんと猫が幸せになれる家に届けてるんだよ」

猫は、人間の歳でいうと武の祖父よりも年老いていたが、祖父を見送ってから死んだ。それから武の家は、ずいぶん変わってしまった。父は祖父と反目していたし、動物嫌いだったから、もう猫を飼うことはできない。武だって、責任を持てないのに生き物を拾ったりしてはいけないことはわかっている。なのにゴンを飼おうとして、かわいそうなことになってしまった。捨てられたゴンは、ちゃんとご飯を食べているのだろうか。危険な目に遭っていないだろうか。

「どうしたの？　杉原くん」

ひどくうつむいてしまった武を、拓也が心配そうに覗き込んだ。

「おれ、家で猫を飼えないのはわかってたのに、お稲荷さんに猫を飼いたいって願い事してしまったんだ。だから……、バチが当たった。おれだけならいいけど、ゴンも不幸になってしまったんだ」

「でも、杉原くんはゴンを助けたじゃん。怪我を治してあげたんだろ？」

それも、武ではない誰かだったほうがよかったのではないか。

「もういいよ。ゴンをさがすのはやめる」

「えっ、本気なの？」

「あの女の人の猫なんだろ。あの人が見つければいいんだ。そのほうがゴンも幸せだ」

拓也は返事に困った様子で、お菓子に手をのばした。なんでこんな自分の話を、さほど親しくもないクラスメイトにしているのだろう。これ以上余計なことを言わないうちに帰りたい。でも、服がまだ乾かない。

帰りたい？　いや、本当はもっと、いろんなことを言ってしまいたいのではないか。

I

「あんたのお父さんだね」

ひいおばあちゃんが急に言った。テレビに、武の父が映っている。ちょうどローカルニュースをやっていて、市内に新しい道ができると熱心に語っていた。

「道なんてつくって、誰が通るんだよ。どうせこの町は人が少ないじゃん」

武がつい毒づく。税金の無駄遣いだと、②ヒハンされているのは知っている。

「でもね、急病人を隣町へ搬送しやすくなるよ。このへんは何でも大町に頼ってるけど、別の町へも行き来しやすくなるから、農作物も運べるしねえ」

ひいおばあちゃんがやわらかく言った。そういう利点もあるのかと、武には意外だった。道路工事を推し進める市と、父を含めた賛成派が、反対派に散々こき下ろされていたのを、武は耳にしていた。抗議に来る人や取材記者に怒鳴り散らして、父はひどく嫌われているし、利権のある人はペコペコするばかりで、滑稽だとしか思えなかった。公私ともに、自分が正しいとばかり声高に主張しては、威張り散らすだけの父親だと思っていた。

「大町止まりだったバスも、こっちまで来るようになるっていうから、行き先も本数も増えるのはありがたいね。ここらは老人が多いから助かるよ」

「でも、空気が汚れるし騒音もあるだろ。親父のせいで、おれまで嫌われたこともあるん

だ」

いやな思いをしたことはいくらでもある。仲がよかったのに、もう口もきいていない友達もいる。

「ま、立ち退きや騒音や、迷惑を被る人もいて、決めるのは難しいからね。嫌われ者になることも必要な仕事だよねえ」

「ふうん、杉原くんのお父さんって、すごいんだね」

「すごくなんかねえよ」

嫌いな父をほめられて、どう感じていいのかわからなくて、武はぶっきらぼうになった。拓也のお父さんだったら、親切でやさしくて、みんなに好かれるいい人に違いないとわかるのに。

Ⅱ

困り果てたとき、ひいおばあちゃんがまた突然話題を変えた。

「ああ、忘れるところだった」

と手をたたく。

「拓ちゃん、お揚げさんを裏庭へ持っていってくれないかい？　このところ狐さんがよく来てるんだよ」

（中略……その狐がゴンなのかもしれないと思った二人は裏庭の雑木林に向かう。）

「猫、いないな」

「ひいおばあちゃんじゃないから、警戒してるのかも」

油揚げを袋から出し、皿に置く。少し離れて様子を見ることになり、ふたりで茂みに身をかがめる。

「杉原くん、本当はゴンのこと、そう簡単にあきらめられないんだろう？」

③ナマイキなのに、武は不思議と、拓也にはむかつかない。

飼えないならゴンがかわいそうだと意見したくせに、拓也はそんなことを言う。わりと

「お稲荷さんに願ったんだから、本気で飼いたかったんだよね」

「願ってみたからって、本当に猫が来るなんて思ってなかったし、だいたい、ゴンはたまたま庭に入ってきただけじゃないか。お稲荷さんがゴンに、うちへ行けって言ったのか？そんなわけないだろ」

信じていないのに、そんな言い伝えがあることを知っていて、A猫がほしいと願ってみた自分は、何を望んでいたのだろう。今も、矛盾した言葉ばかりが口をついて出る。

「本当に来るよ。願ったら、猫が来るんだ。おれ、それでひいおばあちゃんに叱られたことがあるもん」

拓也はため息をついた。あまり思い出したくないことみたいだったが、思い切ったように語り出した。

「ここへ引っ越してくる前は、家族でこの家へ来るのはお正月くらいだったかな。親戚も集まって、いとこたちとテレビ見てたらかわいい子猫が映ってて、それでおれ、何気なく言ったんだ。友達のシンくんが猫をほしがってたなあって。そしたらひいおばあちゃんが、そんなこと言うと本当に猫が来るのに、シンくんが飼えなかったらどうするんだって」

「誰かが猫をほしがってたって言っただけで、願ったことになるのか？　神社で願い事をするのとは違うじゃないか」

「そうだけど、ひいおばあちゃんは、お稲荷さんに聞こえるからって言うんだ」

「で、本当に来たってのか？」

「うん、痩せ細った子猫がシンくんの家に。それでその子を飼うことになって」

「飼ったのならいいじゃん」

「だけど、その子は持病があったらしくて、長生きできなかったんだ」

たとえ長生きしても、猫の寿命は短い。祖父が飼っていた猫を思い浮かべ、胸が痛んだけれど、武は素っ気なく言う。

「ふうん」

Ⅲ

「おれずっと、シンくんに悪いことをしたような気がしてて。おれが余計なこと言わなき

や、元気な猫をもらったり買ったりできたかもしれないじゃん。ちょうどおれが転校する前に、猫が死んじゃって、なんか、電話もできなくて。親友なのに、それっきりなんだ」

飄々（※淡々としている様子）として、悩みのなさそうな拓也だけれど、転校してきてまだ二月ほどだ。それなりにクラスに溶け込んでいるようでいても、心細いのだろう。前の学校にいた親友にも、簡単に相談できない。だから、武なんかの猫さがしに首を突っ込んでいる。

その心細さは、武にもわかるような気がした。小学校のころ仲のよかった友達は、杉原議員の子とつきあうなと言われて、離れていった。いや、父が原因だとは限らない。武自身、自分を持ち上げてくれて、わがままを言える相手を取り巻きにするようになったからだ。いつからか、自分が中心にいないと苛立つようになった。周囲の大人が、父を持ち上げ、武のこともちやほやするからだ。勘違いでも寂しいから、うわべだけのちやほやから抜け出せなくて、どんどん孤独になっていく。

B ほしかったのは猫なのか、それとも、寂しさを紛らせてくれる何かだったのか。

「そいつは、病気の猫を飼ったこと、きっと後悔なんかしてないって。最後まで飼ったんだから、その猫のことが本当に好きになったんだ」

気休めかもしれない。拓也の友達の本当の気持ちなんて、知りようがないのだから。それでも武は言いたかったし、拓也は、ほっとしたように顔を上げた。

「そうかな……。だったらいいんだけど。杉原くんは、どうして猫を飼いたいと思ったの？」

不思議と今は、自分のことを隠そうとは思わなかった。こいつになら言ってもいいかと、くだけた気持ちで口を開く。

「じいちゃんが生きてたころ、猫を飼ってたんだ。おれが生まれる前からいる猫だったから、兄貴風吹かしてるようなところがあって、蟬やバッタの捕り方を教えようとしたり、友達と取っ組み合ってると割り込んできたり。あのころは、悩みなんかなくて、おれは、卑屈になることもなかった」

猫がいたからって、武の周囲が変わるわけじゃない。でも、怪我をしたゴンが現れて、助けなければと必死になったとき、空洞だった胸の奥が、あたたかくふわふわしたもので満たされるようだった。まるくなったゴンを抱いたときの、おだやかで愛おしい感覚に、武自身も包まれた。大事にしなければならないものを得て、背筋が伸びるとき、家族も友達も、ふだんの日々も好きでいられる、そんな自分に戻れそうな気がしたのだ。

「今は卑屈なのか？」

直球で訊いてくる。

「威張っているくせに、てか？」

武がにらむと、拓也はかわすように笑う。でも、拓也は不思議と、武のことを怖がらない。

「おれのこと、怖がるやつを見ると、もっと怖がらせてやりたくなる。今のおれはいやなやつだ」

Ⅳ

「べつに怖くないのにな」

拓也は本気で不思議そうに首をかしげた。

「吉住が変わってるんだ」

「たぶん、杉原くんが猫をさがしてたから、親近感が持てたっていうか」

なんで猫なんだろう。猫がいたら、何が変わるみたいに信じているのはどうしてだろう。武は、はにかむ拓也に微笑もうと努力する。うまくいったかどうかわからないけれど、お互いの間に伝わるものはあったと思える。それからふたりで、じっと、風の音や周囲の気配に耳を澄ませる。

問一 ‖線①～③のかたかなを漢字に直しなさい。

問二 次の文章は本文中から取り出したものです。どこにあったものだと考えられますか。最も適切な箇所を文中の［Ⅰ］～［Ⅳ］から選び、記号で答えなさい。

情けない武を知ったら、弱みを見せたら、なめられる気がする。でもそれは、自分には何もないからだ。勉強にしろスポーツにしろ、人より優れたところが何もない。自分勝手で人に頼られもしない、ただの嫌われ者だ。

だからって、人のことも認められない。

問三 下の表は、本文中で起こった出来事と武の心情・態度の変化、武のセリフをまとめたものです。これについて、1～4に答えなさい。

1 ［(1)］に入る武の心情・態度について、次の文の【❶】【❷】にあてはまることばをそれぞれの指定字数で答えなさい。

武は本当はお稲荷さんが猫を配る言い伝えを信じている。

だから、【❶ 十字以内】という確信があってゴンを大事に思い、飼えないのに拾ったために【❷ 二十字以内】のではないかと不安になっているが、口では強がっていた。

2 ［(2)］に入る武の心情・態度として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分こそがゴンを幸せにしてやれるはずだという思いを強くし、すぐにも探しに行きたいが、拓也の前では素直になれず反対のことを言った。

イ 祖父と一緒に猫をかわいがっていたころの自分にはもどれないと思うと、何もかも嫌になり投げやりな態度をとった。

ウ お稲荷さんと猫の言い伝えが迷信ではないと思い始め、自分の軽はずみな行動がわざわいを招くことが心配になり弱気な態度をとった。

エ ゴンを拾った後悔が強まり、自分にはゴンを飼うことを願う資格がないという自分自身でも認めたくない方の本心が口をついて出てしまった。

起こった出来事	武の心情・態度	武のセリフ
、	(1)	「またそれかよ。お稲荷さんが猫を配るなんて、迷信だっての」
拓也とひいおばあちゃんが交わす話を聞く。	← ひいおばあちゃんの話に引き込まれた。	← 「ネズミは捕ったのか？」
	← (2)	← 「おれ、家で猫を飼えないのはわかってたのに、お稲荷さんに猫を飼いたいって願い事してしまったんだ。だから……、バチが当たった。おれだけならいいけど、ゴンも不幸になってしまったんだ」
武の父についてのひいおばあちゃんの評価を聞く。	(3) どう感じていいのかわからなくて、ぶっきらぼうになった	「すごくなんかねえよ」
拓也と雑木林の茂みにひそむ。拓也の打ち明け話を聞く。	←	「そいつは、病気の猫を飼ったこと、きっと後悔なんかしてないって。最後まで飼ったんだから、その猫のことが本当に好きになったんだ」
← 拓也に自分のことを打ち明ける。	(4) ← 不思議と今は、自分のことを隠そうとは思わなかった。こいつになら言ってもいいかと、くだけた気持ちで口を開く。	← 「じいちゃんが生きてたころ、猫を飼ってたんだ。（中略）あのころは、悩みなんかなくて、おれは、卑屈になることもなかった」
		「おれのこと、怖がるやつを見ると、もっと怖がらせてやりたくなる。今のおれはいやなやつだ」

3 ――線(3)「どう感じていいのかわからなくて、ぶっきらぼうになった」とありますが、この場面はこの後の武の心情・態度にどのように影響したと考えられますか。次の中から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア ひいおばあちゃんと拓也に対して打ち解けかけていた心に、冷たいかたくなさがよみがえった。

イ 心を縛ってきた父への反感が少しほどけ、人に対して閉ざしてきた心が開きやすくなった。

ウ 今までの考え方がかたよったものであったことを反省し、父のことを冷静に考え好感を持てるようになった。

エ 思っても口にできなかった父に対する敬意を代わりに言ってもらえて感動し、一気に拓也に親しみを感じるようになった。

4 (4) に入る、拓也の打ち明け話を聞いた時の武の心情・態度はどのようなものですか。説明しなさい。

問四 本文の内容にあてはまらないものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 拓也にも武にも、ひいおばあちゃんが白い狐やお稲荷さんを固く信じているのを年寄りだからと馬鹿にするような気持がない。このひいおばあちゃんを大事にしているだけでなく、彼らの生活は人を超えた大きなものとのつながりを大事にしている。

イ 武は拓也とその家族に出会うことによって変化するが、拓也やひいおばあちゃんには武と出会うことで新しい経験がもたらされるわけではなく、武との関係にも変化は生まれない。

ウ 拓也は素直に人を信頼する人柄で、この土地に来てまだ日が浅いにもかかわらずひいおばあちゃんの話す伝説を信じる。一方、武はつらい経験もあってひねくれており、この土地の生まれでも伝説を信じていなかったが、拓也との交流を経て次第に変わっていく。

エ 猫を飼ってかわいがったり、その小さい命を大事にしたりすることが人の心を深くいやし、また猫を介して人と人があたたかく結びつくという、猫と人の物語でもある。

問五 ――線A「猫がほしいと願ってみた自分は、何を望んでいたのだろう」、――線B「ほしかったのは猫なのか、それとも、寂しさを紛らせてくれる何かだったのか」について、次の1・2に答えなさい。

1 武がゴンにどのようなことを期待しているのかがわかる一文を、本文の――線Bの後の部分からぬき出し、始めの五字を答えなさい。

2 物語はこの後、武と拓也がゴンを見つけ出し、武はゴンを元の飼い主の恋人の女性に返すことに決めます。武がゴンを手放すことができるのはなぜだと考えられますか。説明しなさい。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

※設問上の都合により、本文には一部省略や改変した箇所があります。

【文章1】

文字のなかった日本に漢字が渡来し、その漢字から平仮名や片仮名が生まれた。この文字をめぐって古代に起こったことと同じことが、のちの大航海時代にも明治維新にも、そして、第二次世界大戦後にも何度も繰り返されることになる。

外国の新しい文化がこの国に到来したとき、まず必ず起こるのはその全面的な受容である。これができるのは、この日本という国がもともと空っぽの国だからである。そこでこの国の人々は珍しい外国の文化はともかく喜んで迎え入れる。そのどの時代にも外国文化を①ソッセンして迎え入れる「かぶれ」と呼ばれる人々がいた。古代の唐かぶれ、安土桃山時代の南蛮かぶれ、明治時代の西洋かぶれ、そして、戦後のアメリカかぶれ。

天平二年（七三〇年）正月、大宰帥（大宰府の長官）だった大伴旅人の屋敷に役人たちが大勢集まって宴を開き、梅の花を歌に詠みあった。その記録が『万葉集』に残っている。（「梅花三十二首」）

場所は大和朝廷の唐に対する玄関の大宰府である。みな唐の詩人気取りで和歌を詠んでいる。なかでも山上憶良は遣唐使の随行員として唐に渡ったことがあり、筋金入りの唐風の文化人だった。梅花の宴を演出したのも彼だろう。この「梅花三十二首」の序を憶良が書いているが、A それは中国の文人たちの詩文の引用でつづられている。

「かぶれ」という言葉は蒸し暑い日本の夏とかかわりが深い。湿気と汗で始終、肌がべとつき、発疹ができたり赤く腫れたりすることをかぶれるというのだが、それになぞらえて呼ばれるこのような外国文化の崇拝者を侮ってはいけない。彼らにも役割りがあって、それは外国の文化を喜んでこの国に迎え入れることであり、和の文化を生み出す準備をすることにある。もし、いつの時代もこの外国文化の崇拝者たちがいなければ、B 和の文化は素材の大半を失っていただろう。

日本人は海外に対して警戒心が強く、閉鎖的で排他的であるという日本人論がある。②島国根性などといういやな言葉まであるのだが、それを日本人がトナえているのなら自分自身に対する誤解というほかはない。実際の歴史をみるかぎり、まったくその反対である。遣唐使の時代にも大航海時代にも、鎖国下にあった江戸時代にも、さらに近代の文明開化期や戦後においても日本人は海外への好奇心が旺盛であり、その文化を受け入れることに貪欲だった。［ C ］それが自由な海に囲まれた島国に住む人々の特性でもあるだろう。

外国文化の受容の次の段階はそのなかからこの国にふさわしいものを選び出すことである。その際、選択の基準となるのは、暑苦しいことを何よりも嫌うこの国の人びとの嗜好に合うかどうかである。

安土桃山時代の茶人たちはその達人だった。当時、南蛮貿易によって中国や朝鮮やフィリピン（ルソン）からさまざまな陶磁器が博多や堺の港に運ばれてきたが、茶人たちはそのなかから簡素な茶室に合う焼き物を選び出した。海外からの渡来品であれ、国内で作られたものであれ、一見、ただの壺や茶碗にすぎなかったものが、彼らの審美眼によっていったん価値を見出され、茶器として取り立てられると、法外な値で取り引きされ、人々の欲望の的となり、末永く名器とたたえられた。

こうして選ばれたものはさらに手を加えて作り変えられる。これが第三の段階である。ここでの作り変えの③ホウシンとなるのも暑苦しさを嫌うこの国の人びとの嗜好に合うようにということにほかならない。もっともわかりやすい例は漢字から生まれた仮名だが、ほかにもさまざまな渡来文化がこのホウシンに沿って作り変えられた。

団扇は中国では蠅や蚊などのいやな虫を追い払う道具、蠅叩きのようなものだったが、日本に伝わると、手で扇いで涼しい風を起こす道具となる。一方、扇は中国伝来の紙と竹を使って日本で考案された。風鈴の④キゲンは寺の屋根の四隅にぶら下げた魔除けの風鐸だったが、これも日本にもたらされると、風に吹かれて涼しげな音を響かせる風鈴になった。

近江の鮒鮨のような馴れ鮨から、やがて酢を使った握り鮨や押し鮨が生まれたのはなぜか。食べ物の腐りやすい夏のあいだ、酢が腐敗を防ぐからであり、夏ばての予防にもなるからである。蕎麦掻きが蕎麦切りになったのはなぜか。蕎麦掻きをもそもそと食べるのは暑苦しいが、細く切った蕎麦切りは見た目も涼しげだからである。

こうしてあげてゆくと、きりがないが、この国に伝わったさまざまな外国の文化はみな［D］、［E］、変容という三つの段階を経て、次々に和風のものに姿を変えていった。そのさい、大事なのはともかく涼しげであるようにということであり、決して暑苦しくないようにということだった。F芭蕉の「秋深き」の句はこのような流れの中で詠まれた。

この空白の島国では太古の昔からたゆみなくこの和の力が働いてきた。もし、日本独自のものがあるとすれば、和の力こそがそれだろう。忘れてならないのは、この和の力は過去のものではなく現在もたゆみなく働きつづけているということである。

（長谷川　櫂『和の思想』に基づく）

問一　‖線①～④のかたかなを漢字に直しなさい。

問二　――線A「それは中国の文人たちの詩文の引用でつづられている」とありますが、その理由の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　山上憶良が唐かぶれの唐文化崇拝者だったから。
イ　梅花の宴は日本の和歌を中国に紹介するため催されたから。
ウ　「梅花三十二首」の和歌は唐の詩の日本語訳だったから。
エ　宴の参加者が中国の文人たちだったから。

問三　――線B「和の文化は素材の大半を失っていただろう」とありますが、本文中に取り上げられている具体例の中で外国文化から取り入れた「素材」にあたるものはどれですか。次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア　漢字　イ　仮名　ウ　扇　エ　風鈴　オ　蕎麦掻き

問四　［C］に入ることばとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　やがて　イ　むしろ　ウ　なるほど　エ　たとえば

問五　［D］・［E］にあてはまることばを本文中からそれぞれ漢字二字でぬき出しなさい。

問六　――線F「芭蕉の『秋深き』の句はこのような流れの中で詠まれた」とありますが、それはどういうことですか。本文の出典『和の思想』の他の箇所などを読んで作成した次の【文章2】〈ノート〉を参考に説明しなさい。

【文章2】〈ノート〉

【芭蕉の「秋深き」の句について】

（大岡信著・長谷川櫂監修『こども「折々のうた」100』より引用）

秋深き　隣は何をする人ぞ　　松尾芭蕉

〈意味〉壁一枚へだてたお隣りも秋が深まり、きょうはしんとしずまっている。さてどんな人が何をしているのか。私と同じように、この秋のさびしさをこらえているのかしら。

【杜甫の詩について】（『和の思想』より要約）

中国の唐の時代の大詩人である杜甫の「崔氏の東山の草堂」という詩がある。杜甫が母方の崔家の別荘で詠んだ漢詩で、その別荘の西隣には、やはり大詩人の王維の住まいがあった。王維はその時、安禄山の乱という大事件に巻き込まれてそこで謹慎処分を受けていた。

※「漢詩」は中国語の詩。漢字だけで書かれている。

【杜甫の漢詩「崔氏の東山の草堂」の内容】

（『和の思想』より引用　※一部省略あり）

この東山にある別荘の何と静かなこと。高く晴れわたる秋の爽やかな空気とともに実に新鮮だ。時が来れば、寺の鐘の音が聞こえ、漁師や樵が夕日を浴びて帰ってゆく。大皿には谷の入り口で拾った栗が剥いてあり、食事には川の堤のあたりで摘んだ芹が煮られる。それにしても、どうしたことか、西隣の山荘にいるはずの王維さんは。ひっそりと閉ざした住まいの門の向こうに松や竹が見えているだけ。

【筆者・長谷川櫂さんの解説】（『和の思想』より引用　※一部省略あり）

芭蕉が杜甫の愛読者であり、旅に出るときも杜甫の詩集をたずさえていたことを思い出せば、この句が杜甫の「崔氏の東山の草堂」の詩を下敷きにしていること、というよりも、その漢詩を俳句に翻案（※翻訳ではなく、元の筋や内容をそのまま使って改作すること）したものであることは明らかだろう。

杜甫の詩が描いているのはまさに中国風の豪勢で堅固な世界である。広大な敷地を持つ崔氏の山荘。卓上に並べられたご馳走の数々。その隣にある、今はひっそりと門を閉ざしているけれども、これも名高い王維の屋敷。そこにはゆるぎない中国の山河があり、その上をたゆみなく太陽と月がめぐる。

一方、芭蕉の句が描くのは同じ隣とはいっても豪華な別荘などではなく、壁一枚で仕切った粗末な長屋や質素な草の庵を想像させる。

このとき、芭蕉には、昔この蒸し暑い島国にふさわしいように中国の書を日本の書に作り変え、さらに漢字から仮名をつくり出したのと同じ力が働いていた。

問七　本文の出典『和の思想』の別の箇所には次のような文章があります。これを読んで、後の1・2に答えなさい。

※文章には、設問上の都合により省略があります。

【文章3】

「和という言葉は本来、互いに対立するものを調和させるという意味だった。そして、明治時代に国をあげて近代化という名の西洋化にとりかかるまで、長い間、この意味で使われてきた。和という字を『やわらぐ』『なごむ』『あえる』とも読むのはそのためである。『やわらぐ』とは互いの敵対心が解消すること。『なごむ』とは対立するもの同士が仲良くなること。『あえる』とは白和え、胡麻和えのように料理でよく使う言葉だが、異なるものを混ぜ合わせてなじませること。」

「日本独自と考えられているものもその由来をたどってゆくと、ほとんどが外国産のものにゆきつく。それを解体してはぎとってゆくと、最後に残るこの国独自のものといえば、緑の野山と青い海原くらいのものだろう。日本とは太古の昔からずっとこの緑の山々のほか何もない島々だった。

何もないからといって嘆くことも卑屈になることもない。それどころか、□であることは大いに誇るべきことなのである。というのは、日本という国は大昔から次々に海を渡ってくるさまざまな文化をこの□の山河の中に受け入れて、それを湿潤な蒸し暑い国にふさわしいものに作り変えてきたからである。もしも、この国が□でなかったならば、いいかえると、何かがぎっしりと詰まっていたならば、海を渡ってくる文化はことごとく水際で弾き返されてしまっていただろう。」

1　□にあてはまることばを、**【文章1】**から三字以内でぬき出しなさい。

2　**【文章1】**中の――線G「和の力」とはどのようなはたらきのことを言うと考えられますか。説明しなさい。

二〇二二年度

国語解答用紙

222210

一

問一 ①

②

③

問二

問三 1 ❶

1 ❷

2

3

問四

問五 1

2

問六 4

問七 1

2

二

問一 ①

②

えて

③

問二

問三

問四

問五 D

E

問六

問七 1

2

座席番号			

受験番号				

氏名

2022K-②